

高山の文化を高めた人々

50

広瀬武夫の少年像を作った医師 中村清雄——一刀彫発展にも尽力

峠 順治



岳父・中村清雄は大正十二年、高山で小児科専門の医院を開業し、その傍ら彫刻にも励んだ。昭和十年、東邦彫塑院展など各地の展覧会に入選し、一角の彫刻家へ仲間入りを果たすと、昭和十四年頃から母校煥章学校（東小学校の前身）の大先輩である軍神・広瀬武夫の造像に心血を注ぎ、三体制作した。

まずは昭和十五年、東小学校校庭に建てた高さ一メートル程の幼年全身像原型である。物資不足のためブロンズ像完成は昭和十九年五月となり、

残念なことに除幕式のわずかに二カ月後に軍需用に供された。二体目は武夫少年の乾漆座像でおよそ六十五センチ、昭和十八年九月の第三十回日本美術院展に出品し、入選している。

三体目も同様の座像で昭和十九年四月に制作、今も東小学校に展示されている。

*

戦後すぐの日展にも乾漆の観音像を出品し入選したが、昭和二十六年頃から木彫に切り替え、昭和二十八年に始まった日本彫塑会へ主力を注いだ。毎年出品し五回目に会友へ、更に毎年入選を果たして昭和三十五年には会員に推挙され、以後は無鑑査となった。

中村は個人としての彫塑技量向上のみでなく、飛騨全体の美術の向上発展も願っていた。昭和十六年に自ら提唱し立ち上げた飛騨美術協会では戦中から戦後にかけて十年以上活動を続け、飛騨美術会の裾野拡大及び水準向上に大いに寄与した。

*

文化活動面での中村の最大の功績は、飛騨一位一刀彫の水準向上に尽力した事と言われる。



東小学校に展示されている広瀬武夫少年像

先ず昭和十年、親友の真蓮寺住職・三島常馨と図って、東京から帝展審査員で日展参与の恩師吉田三郎先生を招聘し、地元的一位細工業界の諸氏に呼びかけて西小学校で講習会を開催している。

更に昭和四十三年と翌年には、飛騨一位一刀彫協同組合の求めに応じて彫刻基礎講習会を実施した。その時、中村は組合と協議の上、組合員だけでなく市内で彫刻に興味を持つている人々にも広く参加を呼びかけた。昭和四十三年の参加者六十二名の中には、組合員のほかその弟子や市民が多数含まれていた。彫刻文化の裾野を広げ、同時に後継者を育成しようとした中村の熱意が伺える出来事といえよう。

一位一刀彫の水準向上に向けた努力はまだある。昭和二



作品制作中の中村氏

十六年ころ木彫に転向した中村が、基礎的デッサンを重視するなど一刀彫に新しい感覚を取り入れる試みを始めた。県美術展に入選した一刀彫師など九名が中村の下に集まって昭和二十七年「一彫会」という塾を立ち上げ、デッサンのほか粘土・石膏の彫塑技術、果ては人体の骨格に至るまで学習・研究が広がった。三年に一回塾展を開く事も決まった。この一彫会で、中村は傘寿を機に引退するまで二十五年間、ひたすら一位一刀彫の水準向上に尽力したのである。

その後、一位一刀彫業界では、国の伝統工芸士資格取得者が四十名弱となったほか、若くして日彫会会員や日展会友に到達した彫師も誕生。流派を超えて後継者育成に努力した中村は、昭和二十七年、高山市文化協会第三代会長に就任。高山市医師会の会長も一期二年務めた。昭和五十五年没。享年八十七才。